出雲大社

～大遷宮を支える匠たち～

＜6＞

機敏な動きで脇固める

とび職人

「雲太、和仁、京三」。1040年前の天禄元年、国内の高層建築ベスト3が、源為憲の「口遊（くちずさみ）」に記された。1位の雲太は高さ約48㍍の出雲大社、2位の和仁は約45㍍の東大寺大仏殿、3位が平安京大極殿と続く。

出雲大社の本殿の高さは現在、24㍍。かつての高層神殿ほどではないとはいえ、ビルの7、8階建てにも相当する。本殿で進む大屋根の修繕は、いっときたりとも気の抜けない高所作業だ。

建設現場で足場組みなどの作業をこなす「とび職人」は、工事の安全を影となって支える。出雲大社でも、宮大工や屋根ふき職人が技を発揮しやすいよう、在郷のとび職人たちが、機敏な身のこなしと的確な判断で、脇を固める。

足場組みや本殿周辺の摂社を覆う素屋根工事などを担うのが、米子や松江市のとび職人たち。

現場主任を務め、20、30歳代の若手や中堅職人を束ねる広野信二さん(36)は「ビルでも歴史的建造物でも、安心して作業できる足場を組むという基本に変わりはない」と言い聞かせる。

藤江組（米子市）で経験を積み、広野組（松江市）を立ち上げた広野さんは、とび歴17年。「過去に遷宮を手掛けた先人のように、足場一つにも丁寧な仕事が問われている」との思いが、足場の姿となって表れる。

「他の職人の仕事や動きを頭に入れたうえで、足場の高さや幅が設定されている」。大修繕を施工管理する清水建設の現場監督の一人、中村国充さん(32)が、全幅の信頼を寄せる。

気概感じる先人の発想

昨年9月、とび職人は、足場組みに加え、宮大工らと力を合わせ、本殿の大屋根から千木と勝男木を取り外した。

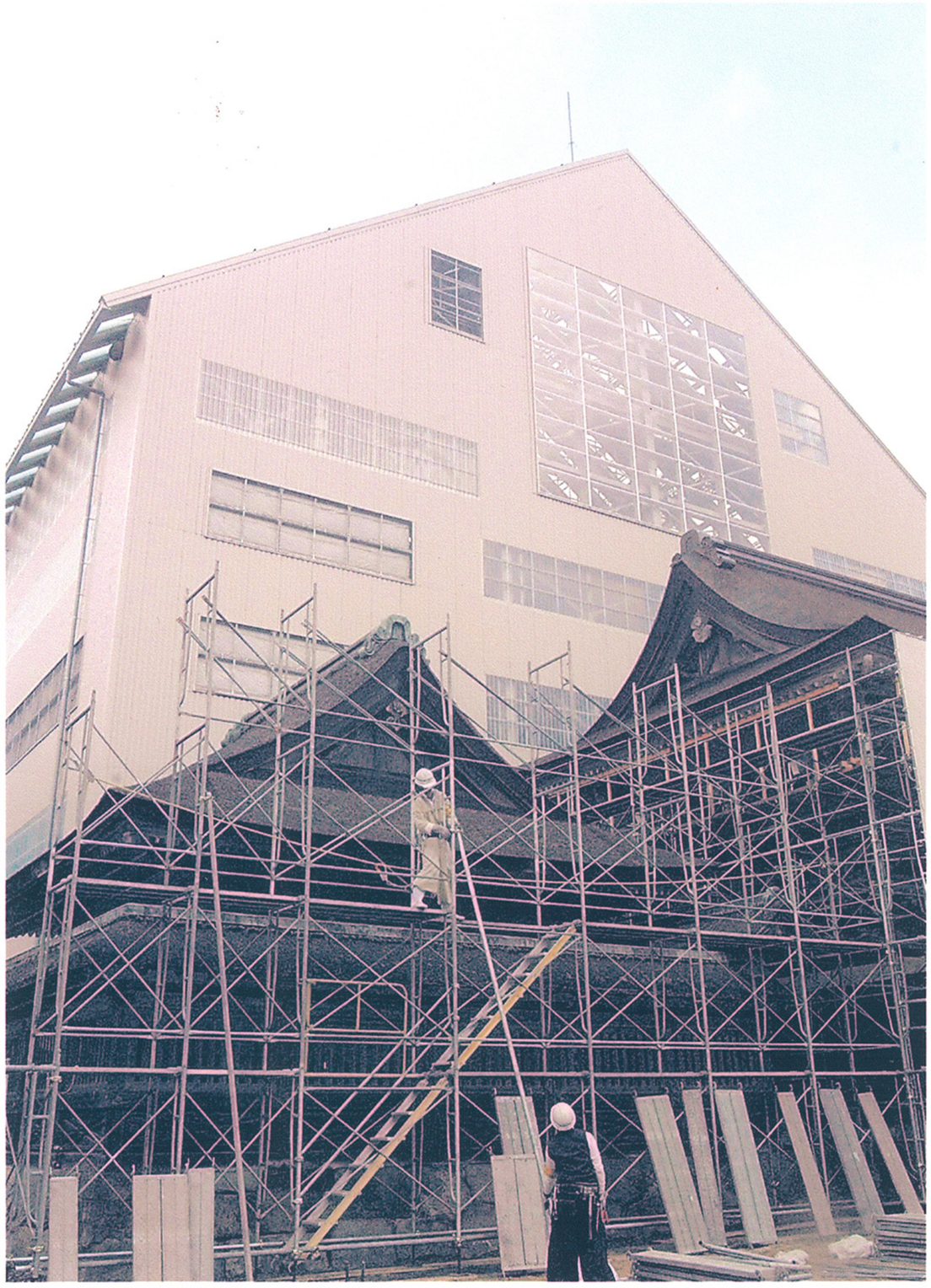
本殿を覆う素屋根の天井部に据え付けられたクレーンを操り、長さ約5～8㍍の部材をつり上げ、あらゆる方向からロープを絡めて引っ張りながら移動。細心の注意を払い、微妙なバランスを取りながら屋外へと運んだ。

機械の力を借りて、遂げた作業も、昭和の御遷宮では、千木と勝男木の搬送は長いスロープを使っての人力が頼り。記録写真で、その様子を知った広野さんは、「先人の発想に気概を感じた。工事の機械化が進むほど現場での発想力が乏しくなるが、精進して少しでも近づこう」と胸に刻んだ。

完成後は表に出ることのない足場だが、職人の安全にかかわる重い任務。職人にとって「ひのき舞台」の歴史的な工事であることは、今も昔も変わりはない。

「出雲大社の現場で、職人のあるべき姿や創造力を感じ、学んでほしい」と広野さん。神前で若手の育成を誓いながらの作業が続く。

（出雲総局報道部・松本稔史）



足場組み

楼門周辺の足場工事をするとび職人たち。後方の本殿素屋根工事にもかかわった＝2009年12月16日撮影

育てる

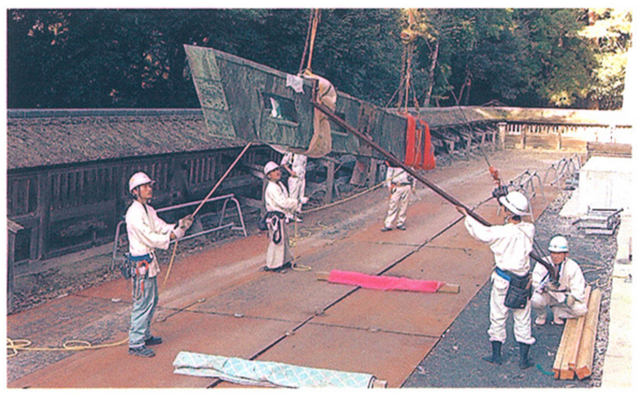
若手とび職人の作業を見守る広野信二さん。時に厳しく指導し、後輩の育成に力を注ぐ＝2009年9月3日撮影

工事の安全

足場は、細心の注意を払い、測量しながら組み立てる＝2009年12月16日撮影

連　携

宮大工とともに外した千木を屋外に下ろすとび職人たち＝2009年9月1日撮影



部材の搬出

ロープを引いてバランスを取りながら、取り外した千木を運び出す＝2009年9月1日撮影

この企画は随時掲載します。